

題画詩について、蘇軾が尊敬する杜甫の、題画詩の主なものを年代順に並べてみると

一、畫鷹 詩及び解説は別紙。開元二十九（七四一）年、三十歳。齊趙に遊んだ時代。

二、畫鶻行 乾元元（七五八）年、四十七歳。長安で左拾遺の時代。描かれた隼の雄々しい姿を見て、志を得ない自分を嘆く。

三、題壁上韋僂畫馬歌（壁上の韋僂が書きし馬に題する歌）。

成都時代（七六〇年）。韋僂が自分の為に壁に描いてくれた馬の姿を見て感慨を述べた詩。

時危安得真致此、時危くして安んぞ得ん真に此れを致して

與人同生亦同死。人と生を同じくして亦た死を同じくするを

今は不穏な時世、どうにかして本当はこのような駿馬を手に入れて、生死をともにすることが出来ないものだろうか。

韋僂は京兆（陝西省）出身の画家で蜀に滞在していた。

四、戲題王宰畫山水圖歌（戯れに王宰が書きし山水の図に題する歌）

上元元（七六〇）年 成都での作

王宰は蜀の画家で、蜀の山を多く描き、そのさまは冴えて鮮やかであるとされた。

十日畫一水 十日に一水を描き

五日畫一石 五日に一石を画く

能事不受相促迫 能事 相い促迫するを受けず

王宰始肯留眞跡 王宰 始めて肯えて眞跡を留む

十日かけて川を一つ描き、五日かけて石を一つ描く。優れた能力は人からの催促を受けないところで発揮される。そうしてすぐれた画才を持つ王宰が漸く本当の筆の跡を残すのだ。

五、丹青引 広徳二（七六四）年の作か。原注に、贈曹將軍霸（曹將軍、霸に贈る）とある。

三国・魏の武帝・曹操の子孫。將軍は絵が巧く開元中（七一三〜七四一）から評判となり、天宝末年（七五五年頃）には、しばしば勅命を受けて、御馬・功臣を描いた。然し罪を犯して庶人の身分に落とされ、安史の乱後には流浪して蜀に至り、成都で杜甫と遭遇した。杜甫は詩によって將軍の絵の巧みなことを称賛し、又不遇を嘆いた。

丹青不知老將至、丹青 知らず老いの將に至らんとするを

富貴於我如浮雲。富貴は我に於いて浮雲の如し

.....

途窮反遭俗眼白、途窮して反て俗眼の白きに遭う

世上未有如公貧。世上未だ公の如く貧しきは有らず

將軍は絵画に対しては歳を取るのも忘れて打ち込み、富や地位などは浮雲のように何の価値もない.....。

みじめな曹霸公を見る俗人の眼は冷たい。これほど貧しく哀れな人は、かつていなかった。

畫鷹

がよう

唐・杜甫 五言律詩 韻字は上平七虞 殊・胡・呼・燕

開元二十九年(七四一年)杜甫三十歳の頃、絵にかいた鷹をみての作。風骨駿爽たる鷹もまた杜甫の愛するところであった。鷹を詠じつつ、凡庸と奸悪をにくむ、杜甫の烈しい気魄が、おのずと字句に溢れている。

素練風霜起 それん た

素練 風霜に起ち

蒼鷹畫作殊 そうよう えが な しゅ

蒼鷹 画き作して殊なり

攫身思狡兔 すく こうと

身を攫めて狡兔を思い

側目似愁胡 そば しゅうこ

目を側めて愁胡に似たり

條鋏光堪摘 とうせん つま た

條鋏 光りて摘むに堪え

軒楹勢可呼 けんえい

軒楹 勢い呼ぶ可し

何當擊凡鳥 いつ まさ ぼんちよう

何か当に 凡鳥を撃ち

毛血灑平蕪 へいぶ そそ

毛血 平蕪に灑ぐべき

【題意】鷹の絵を見て作った詩。どこで書かれたか未詳。前半は描かれている鷹の描写、頸聯は画工の巧みさ。尾聯は絵の鷹から本物の鷹へと思いをめぐらす。

【語釈】○風霜起…描かれている鷹の猛々しい様子は風霜をわきばさんで起っているようだ。○蒼鷹…鷹。一説にごましおの羽色の鷹。○殊…普通と違って特に優れている。○狡兔…身のこなしが軽くて素早く逃げる兎。○似愁胡…鷹の青い眼や深い眼窩は、しばしば胡(西方や北方の異民族)が愁えるさまに喩えられる。胡人は目が落ちくぼんで、悲しげに眉をひそめるような容貌に見えた。○「條鋏」…二句 足に繫いだひもを解き鷹を軒端から呼んで獲物を襲わせようとする。○「毛血灑平蕪」…戦国・楚の文王の鷹が雲の果ての鳥を目指して飛び立ち、やがて雪のように羽が落ち雨のように血が降り灑いだとあるのを踏まえる。

【現代語訳】白い絹の上に風と霜を翼にはらんで飛び立つばかりに、鷹が巧みに描き出された。身を引き締めているさまは素早い兎に思いを凝らしているようで、横目で見ているさまは異人が悲しんでいるかのようだ。足ひもや金具は光っていて摘んで鷹を解き放せそうだし、軒先から呼べば飛んできそうな勢いだ。何時になつたら並の鳥に撃ちかかり、荒れ野に血を撒き羽毛を散らすのだろうか。